

コンコンとドアを

ノックして欲しいと願ひ

仲間と体験談をつづりました



自助グループに繋がって：

M e r r y

思い返せば、幼い頃からやりにくい息子だった。多動でじっと出来ず、幼稚園に入ってから何度か脱走して帰ってくる。「どうして他の子の様に普通にいられないの！」私は嘆いていた。そんな息子が中学生くらいから問題行動が出てきて、その中でイジメを受けたりもしていた。彼が薬物と出会ったのはそんな頃だったと思う。それを友達のお母さんから聞いた時、若気の至りですぐに止めるだろうと楽観していた。ところが止めるどころかどんどんエスカレートして、やがて覚醒剤まで手を出していく。その頃の私は何も知らなかった。

高校も中退して、仕事をして、させても何一つ続かない。息子はそれでも家にいれば、生活は出来て何も困らない。ただ、遊ぶお金はないから消費者金融でカードを作り、隠れて借金を増やしていた。そして、薬物仲間と窃盗事件と覚醒剤使用で逮捕される。窃盗事件に関しては共犯者として、主犯格の友達にそのかされ可哀想な息子と勘違いしていた私達夫婦。私選弁護士を雇い、執行猶予を取り、喜んで息子を受け入れた。もう大丈夫！今度こそ反省し二度と薬物には手を出さず、普通に仕事をして生きていくってくれるにちがいない。でも、甘かった！彼は再び薬物に手を出していたようだ。「オカン、ごめん。オレまた薬に手を出してしまった」というメモを彼の部屋から発見した時は、頭が真っ白になり、私の頭の中ではその事実を否定した。これは何かの間違いだと自分に言い聞かす。私も病んでいた。彼はそれからも変わらず仕事に行っていた。ただ一つ変わった行動で、仏壇に手を合わす姿をよく見かけた。そして、あの日がやってきた。

早朝、ドアのチャイムが鳴り五、六人の刑事がやって来たのだ。出勤前の息子を起こし、刑事達が彼の部屋を調べる。出てきたのは、あのメモだった。息子は連れて行かれ、私はその日どう過ごしてしていたのかは覚えていない。暑い夏だった。

私はショックでしばらく外出も出来なかった。息子が犯罪者となって、刑務所に入る。私は犯罪者の親なのだ。私はインターネットで調べて、自助グループを知る。誰にも相談する事も出来ず、自助グループの重い扉を開けた。その頃、今のような家族会があったら良かったのにと、切に思う。

自助グループの扉を開けた瞬間、衝撃を受ける。皆、笑っている。明るい笑顔からはそんな辛い経験をした人達には見えない。私は初めて、同じ経験をした人に出会う事ができ、薬物依存は病気であり、家族もまた病んでいる事を知る。家族がどう対応していくかを学び、実践していく事が出来るようになった。自分に焦点を当て、自分の生き方もゆっくりだが変えていけるようになった。息子が刑務所に入っている間、自助グループに通い続けた。刑務所から帰って来てからも、今でも自分の為に自助グループに通っている。

仲間もどんどん増えていき、いつのまにかオールドカマーと呼ばれる古い人間になってきた。息子はというと、今は家庭を持ち、自分の足でしっかりと歩いて生活をしている。心配はないかという嘘になるが、心配して生きるよりも彼を信頼し、自分の人生にだけ責任を持ち、楽しく生きていく方がよい。幸せは自分で作るもの。世界一不幸だと思っていた私は今、不幸ではありません。

幸せに生きています。今も自助グループの仲間を支えられながら……。

用語の説明

ハイヤーパワー

自分自身を超えた、自分よりも偉大だと認められる「力」。
薬物依存に無力であるからこそ、自分を超えた大きな力に自分をゆだねている。
その力についてどう解釈するかはまったく各人に自由に任されている。

スポンサー／スポンサーシップ

回復の十二ステッププログラムを実践するにあたり、メンバーはより経験のあるメンバーに相談し、助言や提案を示してもらう。その助言者をスポンサー、その関わりをスポンサーシップと呼んでいる。

回復の十二ステッププログラム

回復のプログラムとして提案されている十二のステップは、スピリチュアル（霊的）な特徴を持つ生きかたの原理。

フェローシップ

本来は仲間の集合体を指すが、ミーティングを離れた仲間同士の交流の意味で使われることが多い。